

# “見守り”の視点からみた自閉症児者への余暇支援活動の意義

黒山 竜太

## Leisure support activities that include watching over children and adults with autism

Ryuta Kuroyama

本論文は、ある地域における自閉症児者への余暇支援活動の実践を振り返り、その意義について考察したものである。自閉症児者にとって余暇の充実は重要な課題であり、支援の輪の広がりが望まれる。また、学生にとっても対象児者とのかかわりは貴重な体験である。X～X+2年度の3年間の活動で、対象児者はきょうだいを含め延べ220名、学生は延べ292名の参加があった。対象児者は一定の家族が継続的に参加するなかで、新しい家族が時折参加してくれるような状況であった。学生は、筆者のゼミ所属学生が中心となって運営したものの、その友人や障害児支援に興味のある学生の一群が積極的に参加して活動を支えてくれていた。なかには参加に消極的であったり自信がなかったりする学生もいたが、4～5回以上参加していくことで徐々に活動に対して自信をつけ、意義を見出していったように思われた。こうした余暇支援活動の継続は対象児者・学生双方にとって有益であり、常に魅力ある活動を展開し続ける工夫が必要である。

キーワード：自閉症、余暇支援活動、見守り

### 1. はじめに

「自閉症はひとつの発達障害であり、その行動上への現れは年齢や能力によって異なる。その中心的特徴である社会化とコミュニケーションおよび想像力の欠陥は、すべての発達段階、あらゆる能力水準を通じて異なった形で見られる」(Frith, 1996)。1944年にレオ・カナリーが自閉症という症状群を世に発表して以来、現在までに自閉症という状態像は様々な変遷を経ているが、いまだその原因の特定や治療法は確立されていない。それはつまり、当事者たちは自閉症による困難を抱えながらより良い生き方を模索することが求められ、生活上の困難の改善とともに生活の質の向上が目指される必要があることを意味する。自閉症に限らないが、障害児者本人及び家族は公的な支援だけで生活していくには困難が伴い、また障害をもたない他者からの理解を得られにくいといった心理的な負荷もかかること、理解の広がりに向けて個人で声を上げていくことには限界があることなどから、当事者及び家族同士でつながり支え合う取り組みが必要とされてきた。日本では1967年にはじめて自閉症児親の会が設立され(相川, 2005)て以降、順次各地域でも親の会が立ち上がり、当事者の親たちはそうした会に入会して互いに情報交換を行ったり支援のための声を上げてい

くなどして、子の生活の質の向上のために日々奮闘を続けている。さらなる支援の輪の広がり、そして共助意識の高まりが望まれるところである。

そうしたなかで、自閉症児者の余暇支援の重要性は黒山ら(2011a・2011b)などから指摘されており、休日などの余暇の時間の活用によって、本人の発達援助や生活の質を高めるなどの効果が得られることが期待されている。よって余暇支援活動そのものの継続性、利用者に応じて対応を考慮する柔軟性が重要であり、“見守り”ながら支援し続ける場が求められている。そうした場では、特有の専門的支援技法等を提供する必要はないものの、当事者一人ひとりの状態に応じたきめ細やかなサポート体制が敷かれる必要があり、マン・パワーが欠かせない。人的支援は主にボランティアに頼らざるを得ないが、対人援助職や教員就職を目指す学生、福祉領域等での就労を目指す学生にとっては、卒業して社会に出ていく前に自身の支援のためのスキルアップの経験を体験的に積むことのできる場と考えることもできる。

しかし昨今、大学生の学外活動参加への消極化が懸念されている。荒木ら(2012)は福祉ボランティア活動に関する実態調査から、学生のボランティアへの関心は高いものの実際の活動に結びついていないことを明らかにしている。おそらく、近年の大学における学力保障体制の高まりや経済的困窮のためにボラン

ティアに労力を費やす時間的・金銭的余裕が乏しくなっているなど、大学生の置かれた状況が変化してきていることも関係していると思われるものの、共生社会を目指す我々にとってボランティア活動を行う学生の減少は、学生・自閉症児者相互にとって不利益である。自閉症児者とともに活動できる場を継続的に確保したうえで、学生の参加に対する積極的な働きかけが必要であるとともに、活動の教育的意義についても積極的に発信することが求められていると考えられる。

以上より、本研究では自閉症児のための余暇支援活動として大学を中心としながら展開してきたZグループ（石倉ら、2005・2006など）において、その実践から自閉症児者を集団で「見守り」ながら支えることの意義、及び参加学生が身に付けるべき支援の心構えや視点の獲得を目指した教育的アプローチとしての活動の意義について検討する。

## 2. 方法

対象：X年度からX+2年度までの3年間において実施された「Zグループ」に参加したA大学及びB高校在籍の学生・高校生計110名・延べ292名、及びY市自閉症協会に属する自閉症・広汎性発達障害等の幼児～成人（以下、対象児者とする）、およびそのきょうだい児の計17家族32名・延べ220名。

手続き：「Zグループ」はA大学と自閉症協会W市支部との協力で月1回土曜日2時間の枠組みで定期的開催する余暇支援活動であった。参加する対象児者1名につき毎回学生1～2名を担当スタッフとして配置し、担当の学生はその日の活動中は対象児者に責任をもって付き添った。また、学生の中から持ち回りで対象児者の個別担当をしない学生リーダーを毎回事前に選出し、該当回の活動内容を決定し、運営した。活動内容の決定については、親の会とも相談のうえ、時間内に実行可能で安全が担保される範囲内で、調理や遊びなどを通して参加者同士のコミュニケーションが図れるものを選定した。また、対象児者の特性を考慮し、活動内容の説明は視覚的にわかりやすいよう工夫したり、安全が確保されるような事前準備を、リーダーを中心とした学生たちで行った。親の会には活動内容を事前に通知し、期日までに参加者を募った。学生リーダーは筆者の担当ゼミ生が行い、その他の学生の参加については興味のあるA大学学生に広く授業等で募集した。活動日前日までに対象児者及び学生の人数を把握し、筆者と学生リーダーとで組み合わせを行った。組み合わせの際にはできるだけ毎回の参加者が重ならないようにし、また学生の学年や子どもへの関わり経験に配慮した。活動当日の朝、参加学生たちにはリー

ダーから一日の流れや注意・配慮事項を説明のうえ、担当児者の特徴や配慮事項などについてそれまでの活動記録を参照してもらい、特に注意の必要な子どもについては直接筆者やリーダーから想定しうる注意点を伝えて活動に臨んでもらった。具体的には、急に集団から外れて外に飛び出したり、音に敏感で突然パニックになり自傷行為が始まってしまうことがあったり、暑さで急に服を脱ぎ出す可能性があったりする、といった事柄であった。活動終了後、学生には自由記述で活動時の参加児者の様子について感想を求め、口頭でシェアリングや必要に応じて筆者や他教員から関わりのアドバイスをを行った。なお、本活動は提携先の高等学校に所属するボランティアサークルからも協力を得、サークルに所属する高校生たちも部長教員の引率の下、不定期にスタッフとして参加してもらった。分析方法：当該期間の時期と活動内容や活動回数、および対象児者及び学生スタッフの参加人数を整理し、学生については学部や筆者のゼミ所属であるか否かを確認した。

## 3. 結果

### (1) 活動の時期・概要と参加人数

まず、活動の時期と概要についてTable 1.に示した。X年度は5回、X+1年度は7回、X+2年度は5回、計17回の実施であった。実施回数の増減や開催間隔の変動の要因は、筆者の担当ゼミ生の人数的変動や大学行事に伴うところが大きかった。また、対象児者と学生の参加人数の推移をFigure 1.に示した。

対象者の人数は平均12.94名であり、おおむね10～15名で推移した。一方、学生スタッフの人数は平均17.12名であり、おおむね12～20名で推移した。ほぼ毎回の活動に参加児者よりも学生スタッフの方が多く集まったが、時には参加児者の方が多き時もあった。とりわけ活動内容によって学生の参加人数は大きく変動し、観光施設の散策やバーベキューといったイベントは人気であった。

### (2) 対象児者の参加状況について

次に、対象児者の参加回数をTable 2.に示した。3年間の活動で1回のみ参加者は9名(28.1%)と最も多く、ついで2・7・13回がそれぞれ4名(12.5%)、16回が3名(9.4%)、5・6・14回がそれぞれ2名(6.3%)、10・15回がそれぞれ1名(3.1%)であった。

また参加形態について、対象児者の17家族中11家族がきょうだいで参加であった。きょうだいの中では、そのうち1名が自閉症の診断が下りているが他はそうではない家族もあれば、きょうだいすべてに自閉

Table 1. 活動の時期と内容の概要

年度	月	場所	活動内容
X	4月	大学近隣の観光施設	散策
	6月	大学内の教室	たこ焼き作り
	7月	大学内の調理室	パフェ作り・七夕祭り
	12月	大学系列の調理学校	クリスマス会ケーキ作り
	2月	大学内の教室	ひなまつり企画（人形作り）
X+1	4月	大学近隣の大型公園①	外遊び
	5月	大学内の調理室	クッキー作り
	6月	大学内の教室	町作り（絵画創作）
	10月	大学近隣の大型公園②	外遊び
	11月	大学内の調理室	クレープ・ホットケーキ作り
	12月	大学近隣のウインナー製造工場	ウインナー作り体験
	2月	大学内の教室	節分企画（豆まき）
X+2	5月	大学内の調理室	お好み焼き，母の日プレゼント作り
	6月	大学内の教室	うちわ作り，レクリエーション
	10月	大学内の中庭	バーベキュー，ビンゴ
	12月	大学近隣の窯元	ピザ焼き体験
	3月	大学内の教室	たこ焼き作り，マジック体験

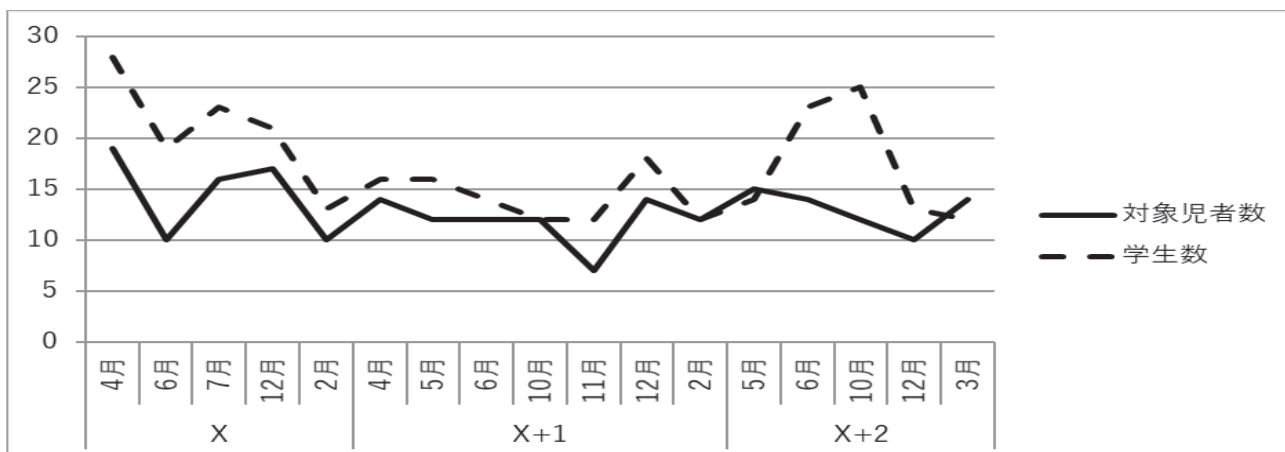


Figure 1. 対象児者と学生スタッフの参加人数の推移

症の診断が下りている家族もあった。年齢層は7歳から23歳まで（X+2年度時）と幅広く、男女比は21：11と6割程度が男児・男性であった。本活動は自閉症児だけを対象とするのではなく、そのきょうだいや成人した対象者も一緒に活動に参加してもらうことを認めていた。そのためにきょうだいで参加が多かったものと思われた。なお、原則きょうだいに対しては学生スタッフが担当し、障害の有無によって線引きをしない形で活動を行っていた。

そこで、家族ごとの参加回数をTable 3.に示した。1回だけの参加は5家族（29.4%）と最も多かったものの、2・6・7・16回の参加がそれぞれ2家族（11.8%）

で、10・13・14・15回の参加がそれぞれ1家族（5.9%）であり、期間全体の平均参加家族数は7.00、10回以上参加した家族が全体のおよそ半数を占めた。

以上より、期間中5～6家族がほぼ毎回参加して10名程度の対象児者が定期的に参加する中で、新たにグループに関心を持った方が試行的に1度参加するといった状況であったことが示唆された。1回だけの参加者は、自閉症親の会に新たに加入してZグループのことを知ったようであった。一方、卒業により学校種が変わるなどして生活スタイルが変化したことで、活動に参加できなくなった方もおられた。

Table 2. 対象児者の活動参加状況

性別	年齢	X					X+1					X+2					参加回数計			
		4月	6月	7月	12月	2月	4月	5月	6月	10月	11月	12月	2月	5月	6月	10月		12月	3月	
A-1	女	14	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	16	
A-2	男	12	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	16	
B-1	男	13	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	16	
B-2	女	16	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13	
B-3	女	10	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	14	
C	男	16	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	15	
D-1	男	19	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	14	
D-2	男	17	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13	
E-1	男	10	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13	
E-2	女	7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13	
E-3	男	17	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1	
F	男	19	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10	
G-1	男	14	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	7	
G-2	女	16	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	7	
G-3	女	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	7	
H-1	男	16	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	7	
H-2	男	12	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5	
I	男	12	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	6	
J-1	女	17	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	6	
J-2	男	15	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5	
K-1	男	18	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	2	
K-2	女	10	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	2	
L-1	男	12	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	2	
L-2	男	10	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	2	
M-1	女	17	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1	
M-2	女	15	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1	
N	男	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1	
O	男	11	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1	
P	男	23	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1	
Q-1	女	16	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1	
Q-2	男	14	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1	
Q-3	男	10	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1	
参加人数計			19	10	16	17	10	14	12	12	12	7	14	12	15	14	12	10	14	220

注) アルファベットは同家族を表す  
 注) 年齢は X+2 年度時のもの

Table 3. 対象児者の参加状況 (家族ごと)

家族	参加きょう だいの数	X					X+1					X+2					参加回数計			
		4月	6月	7月	12月	2月	4月	5月	6月	10月	11月	12月	2月	5月	6月	10月		12月	3月	
A	2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	16
B	3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	16
C	1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	15
D	2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	14
E	3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13
F	1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10
G	3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	7
H	2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	7
I	1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	6
J	2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	6
K	2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	2
L	2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	2
M	2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1
N	1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1
O	1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1
P	1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1
Q	3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1
参加家族計		9	7	8	10	7	7	7	5	6	4	8	7	7	8	6	5	8		

(3) 学生の参加状況について

ここでは、学生の参加回数ごとの人数を Figure 2. 及び Figure 3. に示した。1～2回の参加者（第1グループ）が78名で全体の70.9%と多くを占め、3～6回の参加者（第2グループ）が24名で21.8%、9回以上の参加者（第3グループ）が8名で7.3%であった。第3グループのうち1名だけが筆者所属とは別の学部からのボランティア学生で、この学生が最も多い参加数（16回）であり、その他は筆者のゼミに所属する学生であった。また、第2グループには筆者のゼミ以外の学生が40%ほど含まれていた。

以上から、毎年ゼミに所属する学部3・4年生7～8名が定期的に毎回参加して活動を運営する中で、時

折1回きりの学生が参加するという状況であったことが窺えた。ただし、そのなかでゼミの所属でないが複数回参加してくれるようになった学生も複数名みられた。彼らは、ゼミ所属の学生と友人関係にあっただけでなく、障害児者への支援について非常に関心が高かった。筆者が授業等で声掛けしたことがきっかけで複数回来てくれるようになった学生もいた。またある学生は、同系列の高校在籍時から参加しており、大学に進学してからも活動に関わってくれていた。

なお、複数回参加する学生の活動記録からは、参加を重ねるにつれて対象児者への観察の視点がより詳細かつ分析的になされるようになってきていることが読み取れた。

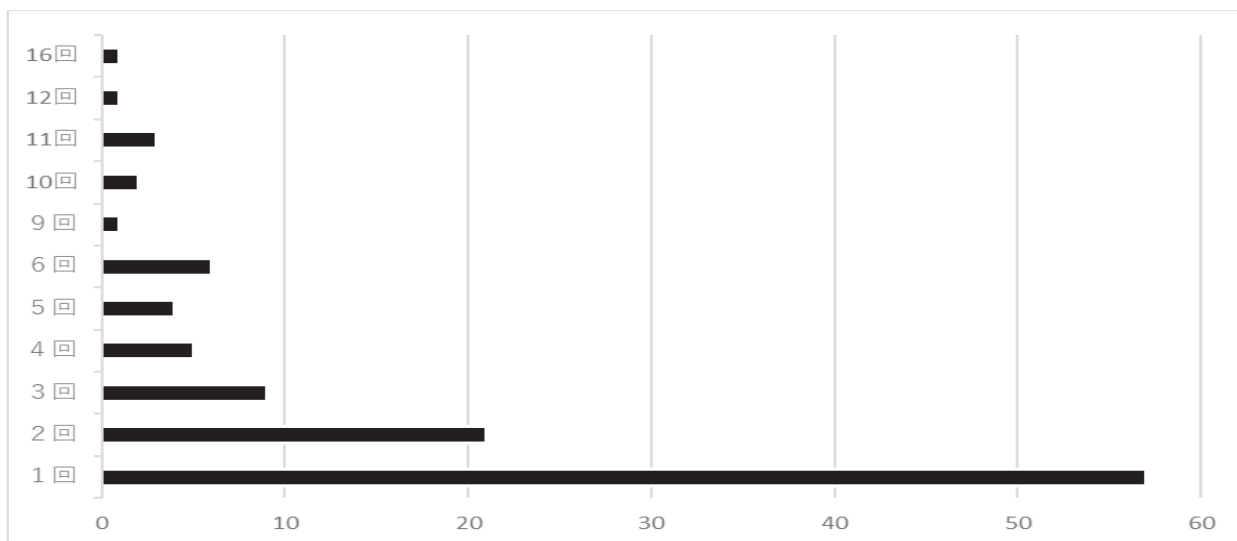


Figure 2. 学生スタッフの参加回数ごとの人数

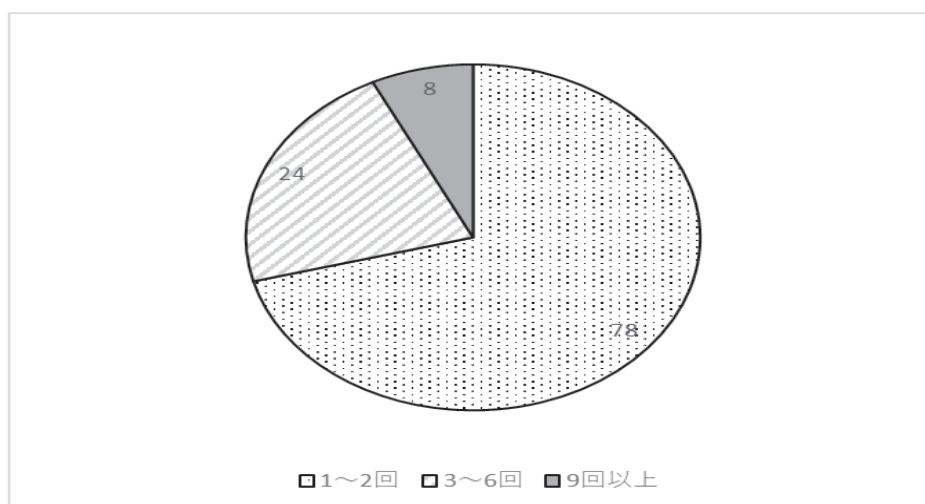


Figure 3. 学生スタッフの参加人数（3群分け）

#### 4. 考察

##### (1) 対象児者及び家族にとっての余暇支援の場の存在意義

Zグループは、自閉症親の会に所属する一部の保護者メンバーによって支えられていたといっても過言ではない。もちろん余暇支援の場の提供者として筆者らとしても必要な体制は整えるよう努力し続けたが、何より筆者は親御さんたちから、学生に障害児へ関心をもってもらい、また学生に支援者として成長してもらいたいという思いを強く感じていた。そのようなZグループへの期待感が、継続参加のモチベーションとなっていたのではないかと考える。そうしたなかで、子どもたちが親元を少し離れて学生達と触れ合い、楽しく過ごす姿を垣間見てこられたのではないかと想像する。こうした理解のある親御さんが複数おられ、また親御さん同士が親密であったことで、グループ活動が継続してこられたことを、振り返って改めて強く感じる。近年、放課後等デイサービスといった行政的な障害福祉サービスは拡大傾向にあるが、あえて専門的な訓練を十分受けていない未熟な学生とのかかわりを選んで頂けたのには、意味があるのではないだろうか。子どもたちにとって余暇を過ごすということが単に安心な場を提供してもらえばよいということだけでなく、さまざまな人との交流の経験を積ませることの必要性や意義を感じておられるのではないだろうか。もう一つ、Zグループの特徴としてきょうだいの参加にも学生を担当させることを前提としたことが挙げられる。これにより、安心してきょうだいも一緒に連れてくることのできたのではないだろうかと考えられた。さらに、ときおり活動内容そのものについても親御さんの方から提案して頂いたこともあり、まさにともにグループを作り上げている感覚であった。障害のある子どもたちへの活動の場づくりではあったものの、そこは障害の有無によらず、また支援を提供するものとされるものに分かれるのでもなく、集まった皆でサポートし合い、楽しく新鮮な時を過ごす場であったように思われる。そのような雰囲気醸成は活動を継続していくにあたり大変重要であり、集団を形成するうえで心掛けておくべき視点ではないだろうか。

##### (2) 学生にとっての余暇支援活動の教育的意義

Zグループを継続していくために、筆者はゼミに入るにはグループ活動に参加することを必須条件としていた。そのため、入った頃は正直しぶしぶ参加していた学生も、回数を重ねるごとに子どもとのかかわりを楽しめるようになり、4年生になれば責任感を持って

リーダーを務めるようになった。おそらくその学生は、経験を重ねるなかで自らグループや活動の意義を見出すことができるようになったのではないかと考える。また、ある学生は自傷行為を重ねる子どもに対して、本当に素朴に「どうしてあの子はあんなに自分を殴るんだらう」と、その都度一生懸命その行為を止めながら、一人考え続けるようになった。そして、筆者のゼミではなかった学生も、少なからず活動に魅力を感じて継続的に参加してくれた。1～2回の参加ではその教育効果は乏しいであろうが、4～5回以上参加してくると、その場に対する認識が変わってくるのではないかとと思われる。

学生にとって、活動に魅力を感じるきっかけは何であろうか。それは、単に楽しかったり、子どもが好きであったり、支援することに意義を感じたりしているのかもしれない。もしくは、そこに「必要とされる感覚」や「いてもいいのだという感覚」を得ているのかもしれない。いずれにしても、子どもたちだけでなく学生にとっても活動が魅力的であることは重要であり、またそれを学生自身が考え立案することを尊重するというスタンスが、こうした活動を運営していくうえでは重要な視点となるのではないかと考えられる。自主性を尊重して押し付けすぎずに見守りを続けるうちに、学生たちが自ら意義を見出していくことが、こうした活動における教育的な意義ではないだろうか。

#### 5. おわりに

参加児者も学生も、継続して参加するのは活動の意義を感じていることに他ならない。参加児者にとっては余暇支援の中で学生とのかかわり経験となり、保護者の息抜きの場にもなっている。一方、1回きりで参加が途切れる人のニーズの把握や参加できなくなった人のその後の支援の把握が課題である。

また学生にとっては、自閉症児に慣れること、子どもの障害特性に体験的に触れて自分で気づき理解を深めること、継続参加により子どもの新しい面に気づき喜びを得るなどの教育効果が得られていることが確認された。学生がより参加回数を重ねられるよう、活動の魅力をより高めるための方法を模索することが課題である。

参加児者や学生の見守りを続けるうえで、何よりも重要なのは活動の継続である。今後は、より効果的な運営手法について検討する必要があるであろう。

ところで、自閉症者が学齢期を終え施設入所生活などをしていく場合も、余暇の時間の過ごし方は重要であると考えられる。松山(2018)は、自閉症者への生活支援について検討し、生活支援員のストレス

視点は、利用者の“お茶の時間”に様々な配慮をしながら支援をすることに繋がることを示唆している。彼ら自閉症を抱える人たちの人生を豊かにするうえで、成人後の施設入所者へのこうした余暇支援のあり方についても様々に検討されることは有益であろう。

### 付記

本論文は、日本特殊教育学会第50回大会にてポスター発表した内容を加筆修正したものです。論文としてまとめるのにずいぶんと時間を要してしまいましたが、Zグループに参加してくれた子どもたち、および学生の皆さん、そして協力して応援して下さった親御さん方に、心よりお礼を申し上げます。

### 引用文献

相川勝代（2005）長崎県における自閉症療育にかかわる歴史—親の会結成とその後の活動の広がり—。長崎大学教育学部紀要 教育科学, (69), 11-26.

荒木剛・山本佳代子・通山久仁子（2012）福祉学科学生の福祉ボランティア活動に関する実態調査。西南女学院大学紀要, 16, 69-76.

Frith, U. (1991). Autism and Asperger syndrome. 富田真紀訳(1996)自閉症とアスペルガー症候群。東京書籍。

石倉健二・眞保真人・高橋信幸（2005）自閉症児と関与者の相互的対人行動について。長崎国際大学論叢, 5, 213-221.

石倉健二・高橋信幸・眞保真人（2006）サポートブックについての一考察—自閉症児と支援者の支援のために—。長崎国際大学論叢, 6, 125-134.

黒山竜太・高島恭子・豊島律（2011a）自閉症児の余暇活動における保護者の支援ニーズに関する研究。長崎国際大学論叢, 11, 67-73.

黒山竜太・高島恭子・豊島律・山邊大地（2011b）余暇活動支援の視点からみる発達障害児への地域支援の課題—保護者へのアンケート調査から—。長崎国際大学社会福祉学会研究紀要, 7, 18-22.

松山郁夫（2018）自閉スペクトラム症児者の社会適応を促す支援に対する生活支援員の認識。佐賀大学教育学部研究論文集／佐賀大学教育学部, 2 (2), 95-100.